

植物  
防疫  
講座

## 虫害編-46

# カキに発生する害虫の生態と防除

福岡県農林業総合試験場 清 水 信 孝

### はじめに

カキは氷河期の終わりに中国大陸から渡来したとも考えられ、「古事記」や「日本書紀」にも登場し、奈良時代には食用とされていたようで、古くから日本人に愛されてきた（農林水産省，2018）。2022年産における我が国のカキ収穫量は216,100tであり、果樹ではリンゴ、ミカンに次いで3番目に多く（農林水産省，2023）、現在も我々の食生活に馴染みの深い果樹品目の一つとなっている。

カキは成熟した果実に渋みがあるかどうかによって甘ガキと渋ガキに大別され、種子の有無と甘渋の関係から完全甘ガキ、不完全甘ガキ、完全渋ガキ、不完全渋ガキの四つに分類される（農林水産省，2018）。甘ガキは樹上で自然に渋が抜ける（ただし不完全甘ガキは種子の数が少ないと渋が残る）が、渋ガキはアルコールや二酸化炭素などを用いた脱渋処理を行うことで食べることができる。我が国におけるカキの栽培は東北地方から九州地方まで広く行われているが、「富有」に代表される完全甘ガキは脱渋するのに比較的高温を要する（山田，2007）ことから、西日本が主な生産地となっている。このうち福岡県では南部の筑後川流域を中心にカキの栽培が盛んであり、「富有」をはじめ「太秋」や「早秋」、本県が育成した「秋王（品種名：福岡K1号）」など、多くの甘ガキ品種が生産されている。

本稿ではカキ栽培で問題となる主要な害虫の発生生態と防除対策について、福岡県の事例に基づき解説する。なお、本稿に記述した防除薬剤は2024年8月時点での農薬登録に基づいている。これら薬剤を使用する際には最新の登録内容を確認していただきたい。

### I フジコナカイガラムシ

#### *Planococcus kraunhiae* (Kuwana)

カキを加害するコナカイガラムシ類としてフジコナカ

Ecology and Management of Key Pests on Japanese Persimmons in Fukuoka Prefecture. By Nobutaka SHIMIZU

(キーワード：カキ，害虫，生態，防除)

イガラムシやオオワタコナカイガラムシ *Phenacoccus bergandei* Cockerell, クワコナカイガラムシ *Pseudococcus comstocki* (Kuwana), マツモトコナカイガラムシ *Crisicoccus seruratus* (Kanda) などが知られているが、福岡県ではフジコナカイガラムシの発生が圧倒的に多い。本種は幼虫および雌成虫（図-1）がワラジ型の体形をしており、体長は雌成虫で2.5~4mm、孵化直後は黄土色、脱皮直後は赤褐色をしているが、それ以降はロウ物質で全身が覆われることから白色に見える。主に歩行により移動分散する。一方、雄成虫（図-2）は体長約1.5mmで翅を有し、飛翔能力がある。被害は主に果実で発生し、本種の排泄物に雑菌が繁殖して果実が黒く煤けた「すす病」（図-3）や、本種の加害痕が早期着色して成熟期にやや盛り上がった「火ぶくれ症」（図-4）を呈する。



図-1 フジコナカイガラムシ雌成虫

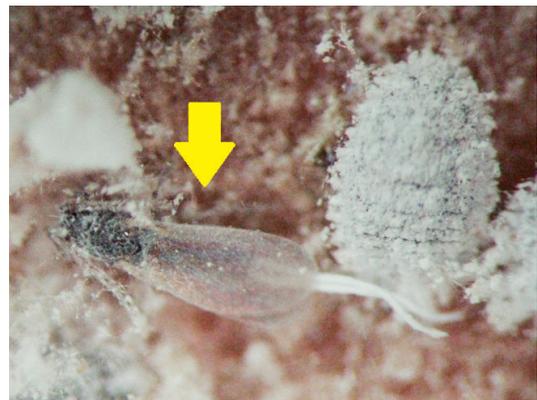


図-2 フジコナカイガラムシ雄成虫